

ARTICLE

長期自然体験活動が未来を拓く力を育む

『福島復興支援事業なすかしドリームプロジェクト11年間の追跡調査からわかること』

茨城県水戸生涯学習センター次長兼企画振興課長 鈴木昭博

1 はじめに

小・中・高等学校の不登校の児童生徒が約30万人に急増している。^{※1}また、精神疾患により休職に追い込まれる教職員の数も増え続けている。このような調査結果の数値データだけでなく、筆者が学校現場で実際に子供たちと接して感じるのは、人間関係づくりが苦手な傷つきやすい子供が増えているということだ。

国立青少年教育振興機構は、「子供の頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査研究（平成30年3月）」の中で、変化の激しい社会に求められる力として「社会を生き抜く力」を掲げ、さらに「社会を生き抜く資質・能力」として、「へこたれない力」、「意欲」、「コミ

ュニケーション力」、「自己肯定感」の4つの力をバランス良く育むことが重要としている。^{※2}

山川（2019）「自然体験活動が参加者の『生きる力』に与える影響―メタ分析による検討―」の研究結果では、4泊5日以上での自然体験活動プログラムが「生きる力」の育成により効果的であることが示唆されたという結論を導き出した。^{※3}

筆者は、茨城県からの派遣で、平成22年度から平成24年度まで国立那須甲子青少年自然の家勤務時代に、14泊15日の長期自然体験活動である「平成24年度福島復興支援事業なすかしドリームプロジェクト」（以下ドリームプロジェクト）を担当した。ドリームプロジ



鈴木 昭博

（すずき あきひろ）

茨城県公立学校教諭から古河市教育委員会社会教育主事、国立那須甲子青少年自然の家企画指導専門職、茨城県教育庁生涯学習課社会教育主事、茨城県公立中学校教頭、国立赤城青少年交流の家次長、茨城県公立小学校長を経て現職。趣味は、トレイルランニング。

2 研究の内容

（1）基本的な考え方

エクト実施後、10年後に再開プロジェクトを計画し、それまでの10年間、参加者や保護者に対して追跡調査を行ってきた。10年間の間には、新型コロナウイルス感染症のパンデミックという全く予想しない事態にも見舞われたが、令和4年に無事に10年後の再会プロジェクトを実施することができた。

本研究では、長期自然体験活動に参加し、意図的・計画的な体験活動を経験した参加者は、社会を生き抜く力が高まり、さらに長期間継続的に追跡調査を実施することで、その効果が強化され则认为、本主題を設定した。

ア 「未来を拓く力」とは

ドリームプロジェクト開催の目的は、東日本大震災後の福島の子供の未来を築いていく、どんな困難にも負けない知徳体のバランスのとれた子供たちを育てることである。未曾有の被害をもたらした大震災、さらには福島第一原発事故による放射能被害など、当時小学生だった子供たちにとっては想像を遙かに超える不安な日々を送っていたに違いない。その子供たちにとって「未来を拓く力」とはどのような力なのか。

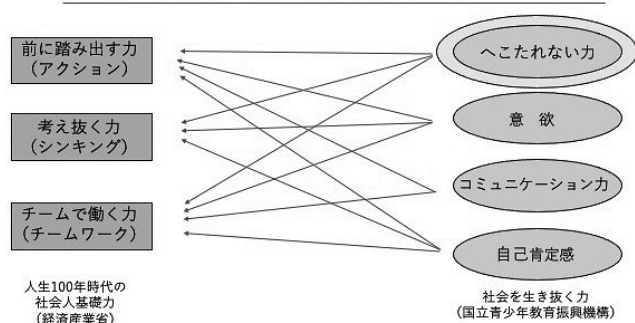
令和5年6月に閣議決定された新たな「教育振興基本計画」では、2040年以降の社会を見据えた教育政策におけるコンセプトとも言うべき総合的な基本方針として「持続可能な社会の創り手の育成」及び「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を掲げている。自分の良さと他者の良さを認識し、あらゆる他者と協働して自らが自立課題解決に取り組み、持続可能な社会の創り手となることが求められている。

経済産業省は、2006年に定義した「社会人基礎力」を、2018年には新たに「人生100年時代の社会人基礎力」として定義し、具体的にそれ

を構成する3つの能力と12の能力要素を示している。

教育振興基本計画の基本方針、国立青少年教育振興機構の「社会を生き抜く力」、経済産業省の「人生100年時代の社会人基礎力」の関係性をまとめると、図のようになり（資料1）、どのような困難な状況にあっても「持続可能な社会の創り手の育成」をしていかなければならないことを考えれば、「へこたれない力」がこれから最も必要な力であると言えることができる。

日本社会に根差したウェルビーイングの向上



持続可能な社会の創り手の育成

資料1 教育振興基本計画の基本方針、国立青少年教育振興機構の「社会を生き抜く力」、経済産業省の「人生100年時代の社会人基礎力」の相関図

以上のことから、本研究における「未来を拓く力を育てる」とは、まさに甚大な被害を受けた福島、東北、日本の未来を担う子供たちに必要な力である。ここでは困難な状況でもあきらめずがんばろうとする力や前向きな思考である「へこたれない力」が最も重要な力と考え、「未来を拓く力」として定義する。

イ 長期自然体験学習の評価とは

橘ら（2003）は、野外教育の課題として挙げられている「効果分析・評価研究の不足」という課題に対応するため、キャンプ場面での「生きる力」を測定する「IKR評定用紙」を開発した。^{※4}また、筆者の所属していた国立青少年教育振興機構は質問項目を絞り込んだ「IKR評定用紙（簡易版）」を作成し、分析用ソフトウェアとして提供している。平成24年度「ドリームプロジェクト」についても、このソフトウェアを活用し評価を行った。

さらに、筆者は参加者がドリームプロジェクト終了後に実生活においてどのような影響を受けたかを追跡調査することにした。長期的な追跡調査やフォローアップの手段を設けることで、活動の効果や持続性を評価することが

できると考えたからである。

ウ 福島復興支援事業なすかしドリームプロジェクトについて

当時、筆者が主担当として担当した長期自然体験活動「なすかしドリームプロジェクト」は、東日本大震災から2年目となる平成24年度に、これからの福島の未来を築いていく、どんな困難にも負けない知徳体のバランスのとれた子供たちを育てることを目標に事業を企画し実施した。

企画にあたっては、震災後にまとめられた「福島県復興ビジョン」（平成23年8月）を踏まえ、事業の目標を定め、様々な機関、教育施設、企業等と連携しプログラムを企画した。

（2）主題に迫るために

ア 未来を拓く力を育てるための手立て
ドリームプロジェクトで目指す子供像は、「◎知・徳・体のバランスのとれた子供の育成・命の大切さを学ぶ・困難に負けない、あきらめない心を育む・仲間と助け合うことの大切さを知る」である。この目指す子供像を達成するために、防災学習、放射能学習、被災地学習、自然体験活動を意図的・計画的に取り入れ、仲間やスタッフと協力

しなければ、自分一人では達成困難な小学生にしてはハードなプログラムを企画した。このプログラムを達成すれば一生の宝物になるような大きな自信がつくであろうと考えた。

（ア）事業概要及びプログラム内容

① 事前説明会

・日時…平成24年7月16日（月） 13…00
～ 15…00

・場所…国立那須甲子青少年自然の家
・内容…事業の趣旨・日程等の説明、熱中症対策講義（大塚製薬講師）、保護者・参加児童別活動（保護者…自然の家概要等説明、参加児童…アイスブレイク、横断幕づくり、看護師との面談）、個別面談

② 本キャンプ

・日時…平成24年7月29日（日）～8月12日（日） 14泊15日
・対象…心身ともに健康で、全日程参加できる福島県内（県外に避難している方も含む）の小学5・6年生

※実際の参加者は22名

・プログラム内容（省略）…詳細は、なすかしドリームプロジェクトFacebookに掲載

③ 事後キャンプ（フォローアップキャンプ）

ンブ）

・日時…平成24年12月26日（水）～12月28日（金） 2泊3日

・内容…本キャンプの振り返り、森林環境学習（紙すき、はがきづくり）、スキー&スノーボード体験（マウントジーンズスキー場）、これからの生活を考えるグループワーク、10年後の再開プロジェクト計画、タイムカプセル（10年後開封）作成 等

④ 10年後の再開プロジェクト

・日時…令和4年8月11日（木）～13日（土） 2泊3日（うち1日オールナイト）

・対象…平成24年度ドリームプロジェクト参加者18名

・内容…再開のつどい、100kmウォーク（10年前と逆コース…国立磐梯青少年交流の家→国立那須甲子青少年自然の家）、タイムカプセル掘り起こし、再開パーティー、10年間の振り返り 等

イ 追跡調査による効果の継続

平成24年度ドリームプロジェクト本キャンプ終了後、12月のフォローアップキャンプにて、10年後の再開プロジェクトを企画した。「10年後、成長した

みんなでまた会おう！」を合い言葉に、10年後の自分に向けた手紙をタイムカプセルとして国立那須甲子青少年自然の家に埋めた。

長期キャンプの評価については、前述したとおり、これまでいくつかの先行研究がなされ、その効果も検証されている。しかし、長期間に渡り参加者を追跡調査した研究はほばないに等しい。筆者は、再開プロジェクトまでの10年間、参加者が普段の生活の中で、ドリームプロジェクトの経験がどのようにに生かされているのか追跡調査をすることにした。また、追跡調査を実施することによって、毎年継続的に当時のキャンプを思い出す機会にもなり、参加者の生活に向上的変容を継続的に促すきっかけとなると考えたからである。

エビングハウスの忘却曲線理論では、一度覚えた内容も1時間後には56%忘れ、1日後に74%忘れてしまったという結果が出ている。ただ、アメリカ国立訓練研究所から出された学習モデル、ラーニングピラミッドでは、他人に教える、自ら体験する、グループ討議するといったいわゆるアクティブラーニングを行うことで、学習定着率の効果

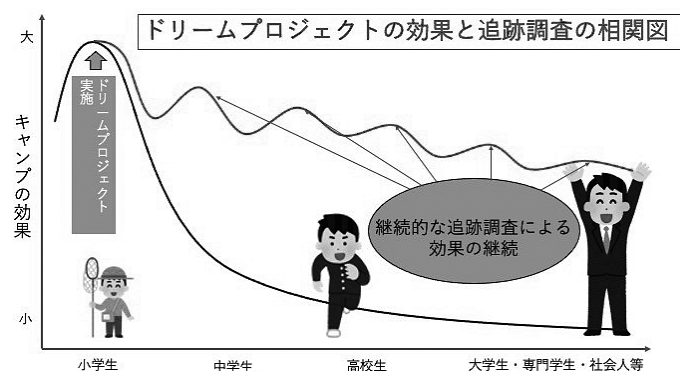
が高いことが示されている。

ドリームプロジェクト自体がアクティブラーニングであるが、さらに継続的な追跡調査によって、当時の内容を思い出し、家族と話をしたり、振り返ったりすることでキャンプの効果が継続されと考えられる（資料2）。

3 研究の実践

（1）ドリームプロジェクトの評価

ドリームプロジェクト初日と最終日



資料2 ドリームプロジェクトの効果と追跡調査の相関図

に「I・K・R評定用紙（簡易版）」による事前調査と事後調査、約3か月後のフォローアップキャンプ最終日に追跡調査を実施した。

特に、「生きる力」の変容が事前から事後にかけて17・5ポイント向上し、「心理的社会的能力」の変容も事前から事後にかけて10・0ポイント向上と大きく向上した。これらは先行研究にもある長期自然体験活動の有効性と合致するものである。

文部科学省は、「一般に、人間関係の問題や生理的な欲求（食べる、寝る、排泄する等）を我慢できるのは2泊程度までで、3泊目頃から生活環境の違いや一定の人間関係の摩擦に絶えられなくなり、時には友人と衝突したり、ホームシックにかかることが多いと言われている。」^{※5}と述べている。14泊15日という長期間、寝食を共にし、様々な課題を乗り越えてきたからこそその変容であると考えられる。

（2）継続的な追跡調査の実施

筆者は、10年後の再会プロジェクトに向けて、毎年1回の追跡調査を実施した。

調査方法としては、平成25年度から

平成29年度までの5年間は、封書にレポート用紙と返信用封筒を入れ、参加者と保護者に直筆でのレポートを提出していただいた。平成30年度は、それまで毎年年度終わりに発送しての追跡調査だったが、言い訳となってしまうが当時の業務の多忙さから次年度になつてしまった。令和元年度からは、GoogleフォームのQRコードを入れた追跡調査案内用紙を封書で送付した。再開プロジェクト終了後の令和5年度は、ハガキにして送付した。

10年という長期間の追跡調査なので、当時は全員が福島県内に住んでいたが、住所変更などで、封書やハガキが戻ってきてしまうこともあった。同時に、本キャンプからずっと継続している事業用Facebookを活用し、追跡調査の案内を投稿し、SNSを活用して連絡が取れるようにした。残念ながら、それでも様々な状況でずっと連絡が取れていない参加者もいる。ドリームプロジェクト追跡調査実施状況は下表（資料3）のとおりである。

資料の回答率からもわかるように、当然のごとく回答率は年々減少していった。また、令和元年度からは、全く

資料3 11年間の追跡調査の状況

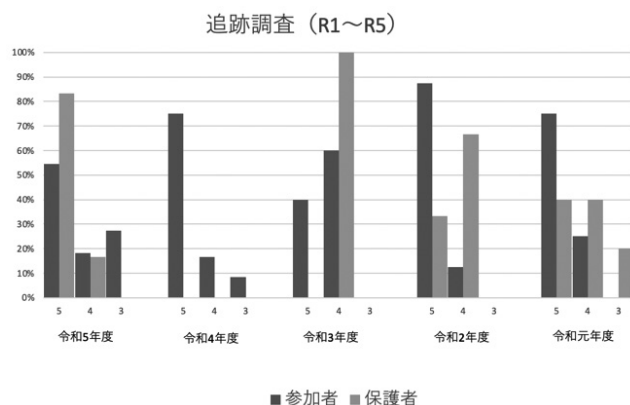
西暦	年度	再会プロジェクトまでの期間 (年日)	内容	追跡調査方法	筆者勤務場所	回答数		回答率		備考
						参加者	保護者	参加者	保護者	
2023	R5			Googleforms	茨城県水戸生涯学習センター	9	6	40.9%	27.3%	
2022	R4	10	10年後の再会プロジェクト実施	Googleforms	古河市立小学校校長	11		50.0%		再会プロジェクト参加確認のため、保護者アンケートの依頼なし
2021	R3	9	新型コロナウイルス感染症	Googleforms	国立赤城青少年交流の家	5	4	22.7%	18.2%	
2020	R2	8	新型コロナウイルス感染症	Googleforms	国立赤城青少年交流の家	7	4	31.8%	18.2%	
2019	R1	7	新型コロナウイルス感染症	Googleforms	国立赤城青少年交流の家	3	5	13.6%	22.7%	
2018	H30	6		作文レポート（直筆）	古河市立中学校教頭					筆者の都合で追跡調査未実施
2017	H29	5		作文レポート（直筆）	古河市立中学校教頭	3	3	13.6%	13.6%	
2016	H28	4		作文レポート（直筆）	茨城県教育委員会生涯学習課	5	5	22.7%	22.7%	
2015	H27	3		作文レポート（直筆）	茨城県教育委員会生涯学習課	10	10	45.5%	45.5%	
2014	H26	2		作文レポート（直筆）	茨城県教育委員会生涯学習課	12	13	54.5%	59.1%	
2013	H25	1		作文レポート（直筆）	茨城県教育委員会生涯学習課	12	12	54.5%	54.5%	
2012	H24		ドリームプロジェクト実施		国立那須甲子青少年自然の家					
2011	H23		リフレッシュキャンプ		国立那須甲子青少年自然の家					
2010	H22		東日本大震災		国立那須甲子青少年自然の家					

想定外の新型コロナウイルス感染症パンデミックにも見舞われた。そのような状況においても、令和4年度に実施した10年後の再開プロジェクト参加確認も含めた追跡調査では、多くの回答が得られた。たくさんの方が再会プロジェクトを待ち望んでいたことがこのことから伺える。さらに、とてもありがたいことは、保護者からの回答がこの10年間一定数継続してあったということだ。家族として、参加者とともに向き合い、家族にとってドリームプロジェクトがどのように影響してきたかも知ることができた。

当時、小学校5・6年生だった参加者は、中学生、高校生、大学生、社会人等と成長してきた。この10年間は、まさに子供から大人になる変化の大きい時期である。ましてや甚大な被害を受けた福島県に暮らす子供たちにとってはなおさらである。反抗期や進路の選択、様々な挫折を繰り返しながら成長した10年間なのであろう。

中学生、高校生となり文章を書くのが億劫になった参加者の代わりに、保護者だけが回答をしてくる家族もあり、保護者から現在の状況を知る機会も得

総力特集：子ども・若者に社会教育は何かできるのか



資料4 R1～R5の追跡調査結果
※ 5段階評価で2、1の評価は0

られとてもありがたかった。
令和元年度からは、意見感想の他に、ドリームプロジェクトが現在の生活にどのような役立っているかの5段階評価も取り入れた。令和元年度はドリームプロジェクト本キャンペーンから7年後である。その結果は（資料4）のとおりである。7年経った後でも、参加者・保護者ともにドリームプロジェクトが現在の生活に役立つ部分はあるかの問いに「非常にあった」等と回答している方が多いことがわかる。

（3）抽出参加者、保護者の追跡調査

抽出参加者・保護者の10年間の追跡調査結果については省略するが、質的調査を経年変化として捉えみると、この10年間様々な困難にも負けず、ドリームプロジェクトで培った「へこたれな力」がそれぞれの場面で役に立っていることがわかった。

参加者の中には、今までよりも積極的に生徒会活動に取り組み、生徒会長を務めた者、途中で進路変更を余儀なくされたが現在は消防士として福島県のために活動している者、この事業実施後教育に関心を持ち教職を目指している者、ドリームプロジェクトで登山を経験し、山の魅力に惹かれ、大学でワンダーフォーゲル部に入部し活動している者など、当時の参加者22名がそれぞれの困難を乗り越え、へこたれずに積極的に人生を歩んでいることがわかる。以下は、参加者・保護者追跡調査の経年変化等の一部抜粋である。

〈参加者・保護者レポートからの一部抜粋〉

・（参加者）僕はいつも辛い時、苦しい時、挫折しそうな時は必ずみんなの笑顔、泣いた顔、共に過ごした日々、

そして100kmウォークを思い出し、いくつかの困難を乗り越えてきました。

・（参加者）「最初は無理だと思っていた100kmウォークや登山なども達成することができたのならこんなこと簡単にできる。」という自信が生まれるからです。

・（参加者）将来の福島、日本のためにも、今学習できること、体験できることをし、大人になってそのことを思い出しながら、自分のすべきことをしたいと思います。

・（保護者）「清水の舞台から飛び降りる」そんな気持ちで送り出したドリームプロジェクトから、もう1年半以上が経過しました。

・（保護者）生かされたことと言えば、打たれ強さでしょうか。野宿もしました。登山もしました。100km歩きました。当時の小学生にはなかなかハードな体験だったと思います。が、やってやれないことはありませんでした。自分のキャパを広げる良い機会であり、キャパなんてどんどん広げることができるのだと気づくよい機会だったのだと思います。

・(保護者) 息子が中学へ入学してから一番変化があったことは私たちに感謝の言葉を言ってくれるようになったことです。

・(保護者) 「約束したんだ！また会おうって！」自分に言い聞かせるように、どんなに辛くても弱音を吐かずに再会を目標に頑張っています。

・(保護者) 毎年、なすかしドリムプロジェクトからのお便りが届くと1年が過ぎたのだなぁ新年度の始まりだなあと季節を感じます。そして、2012年の暑いあの夏を思い出すのです。

・(保護者) 息子の様子ですが、一時は荒れて不登校に半引きこもりのような状態になりましたが、その中でも何とかやるべきことだけはこなし、普通高校に入学しました。結局、通信制高校に転校したのですが、現在は卒業目指して頑張っています。

4 研究の成果

長期自然体験学習に参加することによって、「未来を拓く力」Ⅱ「へこたれない力」が育まれることは、「IKR評定用紙」による調査の数値結果からも

容易に理解することができる。さらに、この10年間の追跡調査による質的調査からも参加者それぞれが様々な場面で「へこたれない力」を大いに発揮し、大人になっていく様子が伺える。

それでは、ただ単に長期自然体験学習に参加すれば「未来を拓く力」Ⅱ「へこたれない力」が身につくのだろうか。このことは、参加者が口々に唱えている「最初はこんなことができるのか？」「絶対無理だ！」と思えるような自分にとってはハードルの高いプログラムが、仲間と協力することで達成できたという「達成感」となり、そしてそれが「大きな自信」となり、その大きな自信が参加者の「自分はできる！」という「自己肯定感」となることで、「やればできる！」という「へこたれない力」が身につくことがわかる。

そのために、筆者は甚大な被害にあった福島をどん底から這い上がって復興できるような未来を担う子供たちを育てるために、どのようなプログラムを企画すればよいかを考えてきた。本物の防災教育を提供するために、新白河駅構内で宿泊し、帰宅困難体験を行った。放射能は安全なのかを知るため

に、大学教授から放射能についての講義を受けた。復興ままだらない被災地を訪れ、自分の目で被災状況を確認し、自分には何ができるのかを考えさせた。

那須甲子連山縦走登山や阿武隈川源流体験を通して、福島のスサライ自然を再認識させた。さらにメインプログラムでは、国立那須甲子青少年自然の家から国立磐梯青少年交流の家までの100kmウォークを通して、仲間と協力すれば不可能なことも可能になるという体験を取り入れた。これらのプログラムを普通の小学生である参加者全員に達成させる、この部分が我々スタッフの腕の見せ所であった。そして、2週間の間、毎日その日の振り返りを実施し、次のプログラムにつなげることを徹底してきた。その結果、参加者全員が大人でもハードな15日間に及ぶプログラムを達成できたのである。参加者全員に「へこたれない力」Ⅱ「未来を拓く力」がついたことが証明された。

また、追跡調査の分析や個別の経年変化を見ていくと、あきらかに「未来を拓く力」Ⅱ「へこたれない力」が継続して身につけていることがわかる。それは、10年間何事も平穏無事に過ぐ

せたということではなく、小学生から大人に成長する間に誰もが経験する反抗期や思春期、進路選択等の様々な困難にも前向きに取り組む、家族や友人等の他者とのコミュニケーションを上手に取りながら、自分の良さを生かして、それぞれ課題を解決してきたことがわかる。さらに、新型コロナウイルス感染症のパンデミックを経験し、社会全体の閉塞感を感じ、不安が多い時期もあったと思われる。そのような状況の中でも、10年前の長期自然体験学習が原体験となり、離れていても共に生活した仲間との絆や、いつも応援してくれる家族の支えを感じること、参加者一人ひとりの「未来を拓く力」^Ⅱ「へこたれない力」が継続的に育まれてきたと言える。

さらに、年に1度の追跡調査に回答する機会が、毎年当時の体験を振り返る機会となったことや、なすかしドリームプロジェクトFacebookが定期的に更新され、これを見れば当時の様子をいつでも振り返ることができる、感じる、プロジェクトの効果を継続させている要因のひとつであるとも言える。

5 おわりに

本研究では、長期自然体験学習の評価のあり方を、当時の調査や継続的な追跡調査によって考察してきた。そして、継続的な追跡調査によって、参加者の「未来を拓く力」^Ⅱ「へこたれない力」が身につくことが解明された。コロナ禍で、様々な体験活動が縮小している。日々目に見えないウィルスにおびえ、マスクの着用を余儀なくされ、一番友達同士がふれあう時期である小学生であってもソーシャルディスタンスが必要と言われ、友だちとの距離を取り、大きな声も出せない。この数年間の体験活動の縮小は本当に非常事態であると筆者は考える。

さらには、人口減少や施設の老朽化などを理由に、公立の青少年教育施設が全国的に廃止、統合、再編成されている。子供たちの体験活動を推進するには公の教育機関である学校教育の中の体験活動が非常に重要かつ有効である。それは各家庭による体験格差に関係なく、誰もが同じ時期に一律に体験活動を経験することができるからである。我々大人も小学校や中学校、高校などの思い出と言えば、宿泊学習や

修学旅行が一番に思い出す行事であると思う。このような機会が減少していく現状に危機的状況を感じてしまうのである。

文部科学省は、令和4年6月に「子供の体験活動推進宣言」を発表した。リアルな体験が減少している現在の子供たちのために経済界の力を借りて体験活動を推進していくというものだ。その中には、体験活動プログラムの利用者と提供者のマッチングポータルサイトの構築も含まれている。筆者もそのプロジェクトチームの一員である。様々な力を結集して、今こそ子供たちの体験活動を推進することが喫緊の課題であると言える。

【参考・引用文献等】

- ※1 文部科学省「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策（COCCOLOプラン）」（令和5年3月31日）
- ※2 国立青少年教育振興機構「子供の頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査研究」（平成30年3月）
- ※3 山川晃（2019）「自然体験活動が参加者の「生きる力」に与える影響―メタ分析による検討―」
- ※4 橘直隆、平野吉直、関根章文（2003）「長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響」野外教育研究、第6巻第2号

※5文部科学省(2008)「体験活動の教育的意義」体験活動事例集―体験のススメ―

・農山漁村での長期宿泊体験による教育効果評価委員会「農山漁村での長期宿泊体験による教育効果について」(平成21年12月)

・福島県「福島県復興ビジョン」(平成23年8月)

・中央教育審議会「今後の青少年の体験活動の推進について(答申)」(平成25年1月)

・「教育振興基本計画(令和5年度～9年度)」(令和5年6月16日)閣議決定

・経済産業省「人生100年時代の社会人基礎力について」(平成30年2月)

・国立青少年教育振興機構(2010)「生きる力」の測定・分析ツール「アンケート用紙・分析ソフト付き」(平成22年度)

・平成24年度教育事業 福島復興支援事業なすかしドリームプロジェクト 報告書

・体験の風をおこそう2 感動を呼ぶ体験活動と先進事例 田中壮一郎 編著 平成25年4月発行 悠光堂

・令和4年度 第46回研究論文集 茨城県教育弘済会 2022

・令和3年度 第45回研究論文集 茨城県教育弘済会 2021

・多様で変化の激しい現代社会に求められる「社会を生き抜く力」 国立青少年教育振興機構 令和2年3月

・福島復興支援事業なすかしドリームプロジェクト facebookページ

<https://www.facebook.com/fukushinadreamproject/>

・かわいいフリー素材集「いらすとや」

<https://www.irasutoya.com/>

社会教育の再設計シーズン2 新書判

『多様な実践者がひろげる社会教育』

～未来への羅針盤をつくる知の冒険～ 社会教育の再設計：シーズン2
今村久美・大畑伸幸・河内ひとみ・左京泰明・宮城潤

発行 日本青年館 2021年11月30日 新書判 64頁 編著「学びのクリエイターになる！」実行委員会
定価 550円(本体500円+税) ISBN978-4-7937-0141-2

社会教育の再設計：シーズン1 新書判

～未来への羅針盤をつくる知の冒険～

『社会基盤としての社会教育再考』

寺脇研・山崎亮・小田切徳美・吉田博彦・牧野篤

発行 日本青年館 2020年12月 新書判 160頁 編著「学びのクリエイターになる！」実行委員会
定価 880円(本体800円+税) 送料 180円 ISBN978-4-7937-0140-5

◆ご注文は最寄りの書店、又は日本青年館までお申し込み下さい◆

発行(一財)日本青年館「社会教育」編集部 〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町4-1 【電話】03-6452-9021 【FAX】03-6452-9026
【メール】social-edu@nippon-seinenkan.or.jp 【ホームページ】<https://social-edu.com>